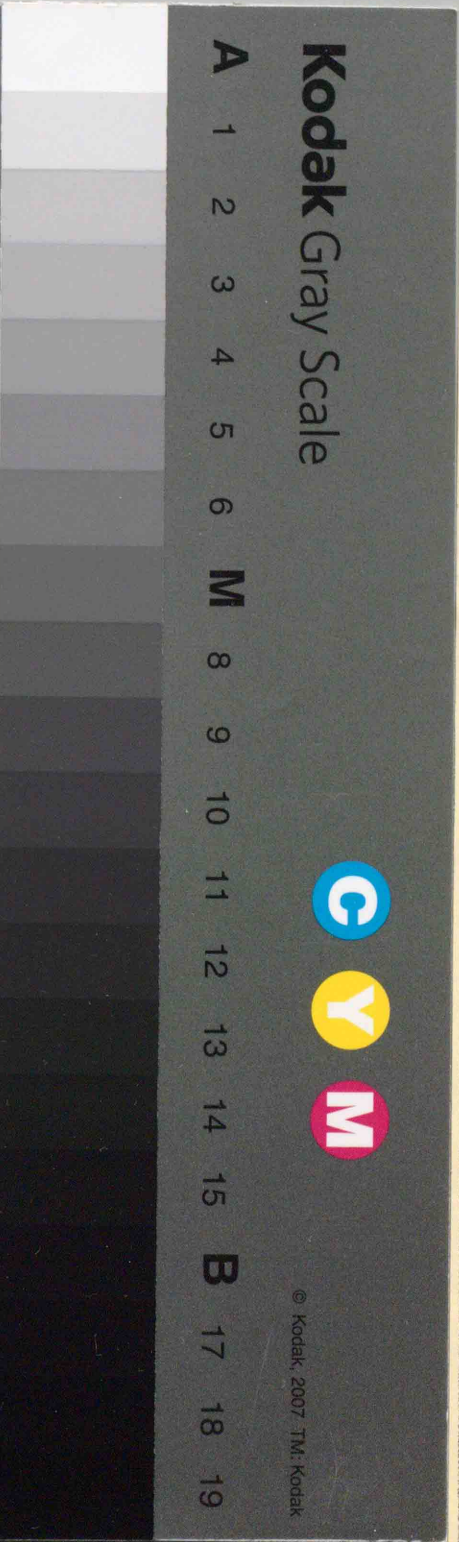
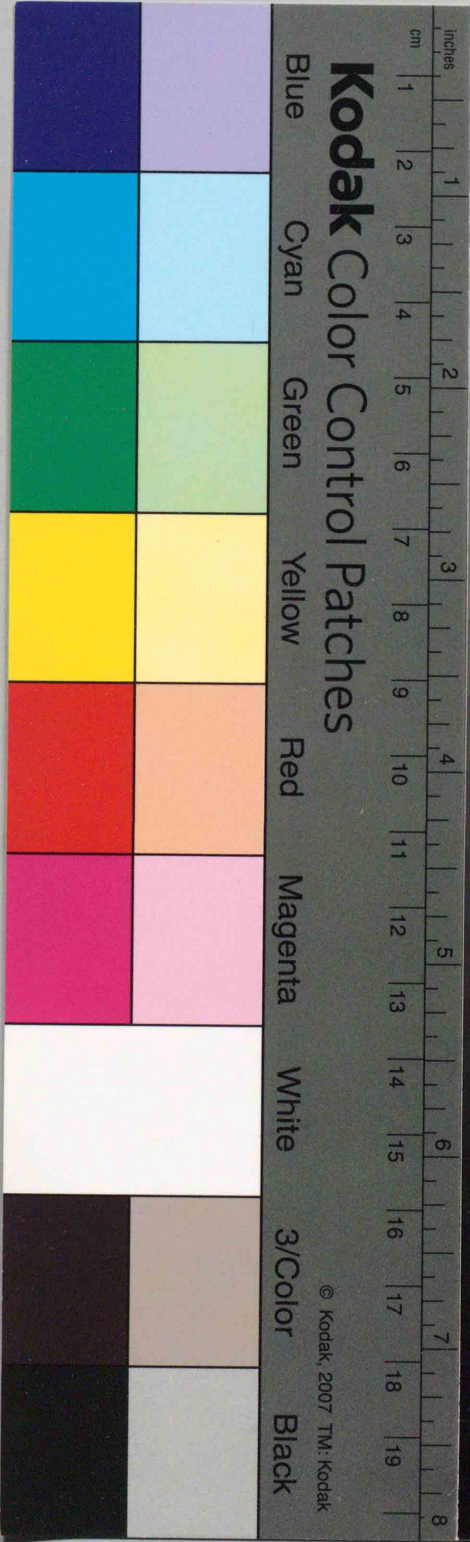


訂改
 中等國文讀本
 卷八

3759
 Fw10
 資料室



41477

教科書文庫

4
810
41-1919
20000 46548



資料室



目次

訂改中等國文讀本

卷八 目次

一	朝思暮想	幸田露伴	一
二	修養	卜部兼好	五
三	重盛諫言 (平家物語)		八
四	公孫樹	薄田淳介	一五
五	才能藝業 (十訓抄)		一九
六	能と謠	大和田建樹	三
七	俊寛		二六
八	富士松		三

Handwritten signature: E. Yata

275.9
Fu 10

日一卅月一年八正大
濟定檢省部文
書科教科語國校學中

文學博士藤井乙男編

訂改中等國文讀本

東京金港堂書籍株式會社發兌

Handwritten note: What to do

九 福原落 (平家物語) 四二

一〇 人道 高山林次郎 四四

一一 與謝蕪村 藤岡作太郎 四六

一二 木枯 西

一三 いざよふ月 阿 佛 尼 五

一四 昨日は今日の昔 本居宣長 五

一五 千遍讀 兩森芳洲 六

一六 壬子試筆の詞 室 鳩 巢 六

一七 宇治川先陣 (源平盛衰記) 老

一八 桃山時代の美術 濱 田 耕 作 七

一九 霞 足 代 弘 訓 八

二〇 柳の北京 坂本健一 八

二一 萬里長城 土井晚翠 八

二二 おどろのした (増鏡) 八

二三 憲法ノ上諭 八

二四 憲法發布式祝辭 三條實美 九

二五 國法 穗積八束 九

二六 落花の雪 (太平記) 一〇〇

二七 雨後 藤井高尙 一〇六

二八 百蟲譜 横井也有 一〇七

二九 四季 卜部兼好 一一

三〇 年ふる鯉 松平定信 一一五

三一 述懷……………佐久間象山…二六

三二 日本國民の覺悟……………三〇

十三 十四 十五 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

目次終



改訂中等國文讀本卷八

◎ 一 朝思暮想

幸田露伴

朝思暮想、朝思暮想。善いかな、朝思暮想や。人當に、朝思暮想すべきなり。

思ふを人といふ。思はざるを土といひ、石といふ。日出でて思ふ。思ふによりて、人幸に人たるなり。然らずんば、人の土石たること久しからん。
想ふを我といふ。想はざるを木といひ、竹といふ。日入つて想

ふ。想ふによりて、我幸に我たるなり。然らずんば、我の木竹たること久しからん。

人の土石たるを免れ、木竹たるを免るゝは、たゞ、思ふあり、想ふあるが爲なり。大いなるかな、思想の人に於けるや。

朝思暮想、朝思暮想。愚なるかな、朝思暮想や。人、當に、朝に思無く、暮に想無かるべきなり。

思ふを苦といふ。思ふ無きを安といひ、樂といふ。眼を思ふ時は、眼を病めるなり。財を思ふ時は、財に渴せるなり。道を思ふは、道、猶、未だ我に存せざるなり。日出でて、便ち思ふ。これ、日出でて、便ち苦有るなり。その思ふ無きに當りては、即ち苦無からん。徒らに思ひ、徒らに苦しみ、多く思ひ、多く苦しむ。思の即

ち苦なるを知らざるに非ずして、しかも、思はざる能はずして思ひ、苦しませざる能はずして苦しむ。人も亦土石に如かずといふべし。

想ふを癡といふ。想ふ無きを明といひ、達といふ。鬼を想ふ者は、中夜瞿然たり。鬼の來りて我を悩ますに非ず、吾の想の我を悩ますなり。その癡、慙むべし。梅子を想ふ者は、舌頭酸を覺ゆ。梅子の來りて、我を欺くに非ず。吾の想の我を欺くなり。その癡笑ふべし。法を想ふものは、理窟勃窣葛藤荆棘の中に七顛八倒して、枉げて心力を傾注し、乾闥婆城を成し、氣盡き身衰ふるに及んで、頽然として萎頓疲弊す。その癡、また悲しみ傷むべし。日入りて、猶想ふ。これ、日入りて、猶癡なるなり。その

瞿然

勃窣
日初出時、
見三城門、樓
櫓、宮殿、行
人出入。但
可三眼見。無
レ有實名三
乾闥婆城、
萎頓
大智度論

想ふ無きに當りては、即ち悩まざる、無く、欺かる、無く、萎頓疲弊すること無く、清風空を度り、明月軒に當るの状あらん。空しく想ひ、空しく癡に、愈、想ひ、愈、癡なる、想の即ち癡なるを悟らざるにあらざるも、しかも、想はざる能はずして想ひ、癡ならざる能はずして癡なる、人も亦木竹に如かずといふべし。

人の土石に如かず、木竹に如かざるは、たゞ、思ふあり、想ふあるが爲なり。苛なるかな、思想の人に於けるや。

朝思暮想。朝思、益有るなり、暮想、功有るなり。人、須く朝に思ひ、暮に想ふべきなり。朝思暮想。朝思、益無きなり、暮想、功無きなり。人、應に朝に思無く、暮に想無かるべきなり。

百日、之を學ぶ、一日、進んで思ふに若かざるなり。百日、之を思ふ、一日、退いて學ぶに若かざるなり。朝思も可、暮想も可。唯、必ず一學字を透過するを要す。(蝸牛庵夜譚)

◎ 二 修 養

卜部兼好

もろ矢

懈怠

花葉、ルト、多ク、シ
花、カ、多ク、シ、シ、タ

ある人、弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心シチ、テイ、イ、クの人、ふたつの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度、たゞ、得失トク、シツなく、この一箭に定むべしとおもへ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろ粗そかにせむと思はむや。懈怠ヒ、ス、ル、ミ、ナ、クの心

二 修 養

五

一念
 みづから知らずといへども、師、これを知る。このいましめ、萬事にわたるべし。道を學する人、夕には、朝あらむことをおもひ、あしたには、夕あらむことを思ひて、重ねて、懇に修せんことを期す。況や、一刹那のうちに於て、懈怠の心あることを知らむや。何ぞ、たゞ今の一念において、たゞちにすることのはなはだかたき。(徒然草)

二

不堪 非家
 よろづの道の人、たとひ、不堪なりとも、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざることは、たゆみなくつゝ、しみて、輕々しくせぬと、偏に、自由なるとのひとしからぬなり。藝能所作のみにあらず、大かたのふるまひ、心づかひも、おろかにしてつゝ

しめるは、得の本なり、たくみにしてほしきまゝなるは、失の本なり (同上)

三

懋、懋
 能をつかんとする人、よくせざらん程は、懋に人に知られじ。うちうちよくならひえて、さし出でたらんこそいと心にくからめ」と、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、諷り笑はるゝにもはぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、常に、泥まずみだりにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳長け人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下の物の上手

瑕瑾、瑕疵
放埒

といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。(同上)

◎三 重盛諫言

中門の廊
受領
衛府
諸司
そばむ

小松殿は、西八條殿の門前にて車より下り、門の内へさし入りて見たまふに、入道、腹巻を著たまふ上、一門の卿相雲客數十人、各、いろいろの直垂に、思ひ思ひの鎧著て、中門の廊に二行に座せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司などは、縁に居こばれ、庭にもひしとなみ居たり。旗竿どもひきそばめ、馬

そばとる
さやめく

の腹帯をかため、兜の緒を締め、唯今、皆、打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子、直衣に、指貫のそば取つて、さやめき入りたまへば、事の外にぞ見えられける。

面はゆし

入道、伏目になりて、流石、子ながらも、内には、五戒を保つて、慈悲を先とし、外には、五常を亂らず、禮義を正しうしたまふ人なれば、あの姿に、腹巻を著て向はんこと、面はゆう心しうやおもはれけん、障子を少し引き立てて、腹巻の上に、素絹の衣

素絹

胸板

を、あわて著に著たまひけるが、胸板の金物の、少しはづれて見えけるを、隠さんと、頻りに衣の胸を引き違へ引き違へぞしたまひける。大臣は、舍弟宗盛の座上につきたまふ。入道のたまひ出さるゝこともなく、大臣も亦申し上げらるゝ、旨も

成親—藤原氏。治承元年、平康賴等と俊寛が鹿谷の別荘に會して、平家を圖る。法皇—後白河上皇。

現

や、ありて、入道のたまひけるは、「あの成親の卿が謀叛は、事の數にも候はず。一向、法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば、鳥羽の北殿へ遷しまるらするか、然らずは、これへまれ、御幸をなしまるらせんと思ふは如何に。」とのたまへば、大臣、聞きもあへたまはず、はらはらとぞ泣かれける。

入道、さて、如何にや如何にとあきれたまへば、や、ありて、大臣、涙を抑へて、「この仰を承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また、御有様を見まらせ候に、更に現とも覺えず候。さす

粟散の境

普天 率土

が、我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の王として、天兒屋根命の御裔、朝政をつかさどりたまひしより以來、太政大臣の官にのぼれる人の甲冑をよろふことたやすかるべしとも覺えず。就中、御出家の御身なり。法衣を脱ぎ棄てて、忽ちに甲冑をよろひ弓箭を帶しましきんこと、内には、既に破戒無慚の罪を招くのみならず、外には、仁義禮智信の法にも背き候ひなんす。かたがた恐れあることにて候へども、心の底に旨趣を遺すべきに候はず。まづ、世に四恩あり、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に、最も重きは朝恩なり。普天の下、王地にあらずといふことなく、率土の濱、王臣にあらずといふことなし。いかに、

蓮府
槐門
進止

況や先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせたまひ、
重盛が無才愚暗の身を以てだに、蓮府槐門の位に至る。加之、
國郡半は一門の所領となり、田園盡く一家の進止たり。これ、
稀代の朝恩にあらずや。此等の莫大の御恩をおぼしめし忘
れさせたまひて、みだりがはしく君を傾けまゐらせたまは
んこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせたまひなん。夫
れ、日本は神國なり。神は、非禮を享けたまふべからず。中にも、
この一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を鎮むること
は、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申
しつべし。退いて、事の由を陳じ申させたまひて、君の御爲に
は、愈、奉公の忠勤を竭し、民のためには、益、撫育の愛憐を致さ

敘爵
しかしなが
ら

法住寺殿
京都の東
部、七條と
八條との間
にありき。
迷廬八萬の
頂

せたまはば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべから
ず。神明佛陀感應あらば、君もおぼしめし直すことなどか候
はざるべき。重盛はじめ、敘爵せられしより、今、大臣の大將に
至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。こ
の恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の
深き色を按ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然れ
ば、院中へ参り籠り候べし。重盛が身に代り命に代らんとち
ぎりたる侍どもを召し具して、院の御所法住寺殿を守護し
まゐらせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はん
ずらめ。悲しきかな、君の御爲に、奉公の忠を致さんとすれば、
迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。傷

所詮

果報

ましきかな、不孝の罪を免れんとすれば、君の御爲には、己に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退維れ谷れり。申し受くる所詮は、唯、重盛が首を召され候へ。いつまでか、命生きて、亂れん世をも見候べき。唯、末代に生を受けて、かゝる憂き目を見る重盛が果報の程こそ拙う候へ。唯、今も、侍一人に仰せつけられ、御壺の中へ引き出されて、重盛の首を刎ねられんことは、いと易き程の御事にてこそ候はんずらめ。これを各、聞きたまへ。』とて、直衣の袖をしぼるばかりにかきくどき、さめさめと泣きたまへば、その座になみ居たまへる平家一門の人々、皆、袖をぞぬらされける。(平家物語)

四 公孫樹

薄田淳介

一

あゝ日は彼方伊太利の 七つの丘の古跡や、
 圓き柱に照りはえて、 石床白き回廊の
 きざはし狭に居くらせる 青地襪ソックスのかたる等が、
 月を経て來んくりすます、 市の施物を夢みつゝ、
 ほくそゑみする顔や射ん。

久米の皿山
—美作國久
米郡。

こゝには久米の皿山の 巔タカごしにさす影を
 肩にまとへる銀杏の樹、 向脛ムネふとく高らかに、
 青きみ空にそゝりたる、 見れば鎧へる神の子の

四 公孫樹

一五

陣に立てるに似たりけり。

二

那義山一那 岐野山美 作國勝田 郡。因幡と 國境。

こゝ美作の高原や、
谿にこもれる初嵐、

國のさかひの那義山の
ひと日高みの朝戸出に、

角笛

遠く銀杏のかげを見て、

あな誇りかの物めきや、

とよむ

わが手力は知らじかと、
木木に空門に吹きとよめ、

軍もよひの角笛を、
家の子あまた集へ來て、

黒尾峠一那 岐野山の峠。
さやぐ

黒尾峠の岨路より、

風下小野のならば田に、

やなぐひ

穂波なびきてさやぐまで、

勢ひあらく攻めよれば、

あなや大樹のやなぐひの
諸肩つよく搖ぎつゝ

黄金の矢束鳴だかに、
賤しきものの逆らひに、

雄話

滅びはつべき吾が世かと、

あざけり笑ふとよもしや、

矢種皆がらかたむけて、

間なく隙なく放つ矢に、

射すくめられし北風は、

またも新手をさきがけに、

雄誥たかく手突矢の

鏃するどき圍みうち、

頃は小春の眞晝すぎ、

因幡境を立ちいでて、

晴れ渡りたる大空を、

南の吉備へはしる雲、

白き額をうつぶしに、

下なる邦のあらそひの、

なじかはさのみ忙しなと、

心うれひに堪へずして、

顧みがちに急ぐらむ。

なじか

あゝ争ひの七八日、

銀杏は征矢を射つくして、

み冬

雄々しや、空手眞裸に、
ほまれの削の諸肩を、
さむき入日にいろどりて、
み冬の領にまたがりぬ。

三

夏永久とことにはに絶ゆるなく、
青きを枝にかへすとも、
冬とことにはに盡くるなく、
毎にその葉をふるひ去り、
さては八千歳、靈木の、
背の削は癒えずして、
戦ひとはに新しく、
はた勇ましく繰りかへす。
銀杏よ、汝常磐樹の、
神のめぐみの緑葉を、
霜に誇るにくらべては、
いかに自然の健兒ぞや。
われ願はくは、狗兒一時的子の、
乳のしたりに媚ぶる如、
心よわくも平和の、
小き名をば呼ばざらむ。

絶ゆる隙なきたゝかひに、
馴れし心の驕りこそ、
長き吾が世のながらへの
榮ぞ、價値ぞ、幸福ぞ。

二十五絃原詩節略

五 才能藝業

もとより、その道々の家に生れぬるは、
さることなり。さなき類も、
ほどほどにつけて、能は必ずあるべきなり。
中にも、氏をうけたる者、
藝おろそかにして氏をつがぬ類あり。
道にあらざる類、
能によりて道にいたる徳もあれば、
氏をつがながため、
道にいたらんがために、
彼も此も、ともに勵むべし。
何となくおまじりたるをりは、
そのけぢめ見えざれども、
藝

われどち

みめ
けたる

能につけてめし出され、たゞ、うちあるわれどちの遊びにも、
 かたへにぬけ出でて、何事をもしたらんは、雲泥の心地して、
 人目い^能みじく^能覺えぬべし。
 すべて、みめよく、品高けれども、あやしく賤しきが能あるに
 立ち竝ぶをりは、その品そのみめも、必ずおもひけたるゝも
 のなり。たとへば、花のあたりの常盤木は、うちみるに、たとへ
 なくさめたれども、春の日數くれ、峰の嵐過ぎたる後に、緑ば
 かりのこりて、かりの匂とゞまらざるが如し。されば、桃李は
 一旦の榮華なり、松樹は千年の貞木なりといへり。
 ① オハケン 身ありて、身の能なきが、一人あるを見るだに、能ある
 をおもひいつるならひなり。況や、能にならぶをりのけちめ

をや。いかに、況や、同じ様なるが、一人は能ありて、一人は能な
 きをや。非能なり (十訓抄)

六 能と謠

大和田建樹

仕手・脇等の役者出でて、舞臺にその技を演ずれば、地謠あり
 て地の文句を同吟し、囃子方ありて、大小鼓・太鼓・笛をしらべ
 あはせつゝ、これを助くる一種の歌舞あり、名づけて能とい
 ふ。能は、藝能の義なり。かくて、これに用ゐる唱歌及び問答等
 の文句を謠といふ。

いにしへは、田樂といふものありて、之を田樂の能といひ、猿
 樂といふものありて、之を猿樂の能といひ、單に能とは稱へ

仕手 脇 地謠 囃子 田樂



ざりしが、田樂廢れて、猿樂獨り行は
るゝ世となりしかば、遂に猿樂の能
を略して、能といふこととはなりぬ。
今の能、即ちこれなり。

樂 猿樂が、
神前に
て奏せ

(七十一番職人歌合所載)



樂 猿

別火

(七十一番職人歌合所載)
し歌舞に出でたるは、疑ふべく
もあらず。今も、能役者の家々に
て重き祕事とし、これを勤むる
前には、必ず數日開別火潔齋す

縁起

といふ翁を、能の第一位に置き、翁は大神宮を表し、千歳は戸
隱大明神、三番叟は住吉大明神を表すと言ひ傳へ、これに次
ぎては、神能とて、高砂弓八幡、養老の類の、神社の縁起や神靈
の來現などを作れるものを重んずるを見て、能の神樂よ
り出でて、神職の手に發育生長せし時代の遺風は、髣髴とし
て面影をおぼゆるにあらずや。

足利氏の頃に當りて、これを業とせしもの、伊勢・近江・丹波・攝
津・大和等各地にありて、自ら流派をなし、近江猿樂・大和猿樂
など稱へしが、就中、春日の社に奉仕したる大和猿樂の四座*
他の諸座にうち勝ちて、その技を今日に傳へしは、藝能のい
みじかりしにもよるべけれど、一は、足利氏に重く用ゐられ

* 圓満井・結
崎・外山・坂
戸

神樂
催馬樂
朗詠
舞樂
今樣
白拍子
延年
曲舞
幸若
平家
宴曲
有度濱
駿河國安倍
郡、久能山
の下。
東遊

しがためなるべし。かく、源をこそ神樂には起したれ、その發育生長するに隨ひては、當時世間に行はれるたる歌舞歌謠例へば、神樂、催馬樂、朗詠、舞樂、今樣、白拍子、延年の舞、曲舞、田樂、幸若の舞、平家、宴曲の類を網羅して、新に作り替へもし、故のまゝ、組み入れもしたるもの多かりけんは、謠を讀み能を見て、その大概の推知せらるゝなり。

試みに見よ。天人、有度濱に天降り、舞を舞ひたるに擬して作れりといふ東遊の舞をもととして、天人が、飛行自在なる衣を漁夫に拾はれ、漁夫はその悲みを見るに得堪へずして、舞樂を奏せしめてこれを返し與へ、天人は喜び、衣を著して、舞ひつゝ、天に昇るといふ羽衣の曲を作り、たゞ、蝶の樂しげに

換骨奪胎

渾然

舞ひ遊ぶといふより外に意味なき舞樂の胡蝶樂を敷衍して、蝶は四季折々の花に飛び翔り遊べど、梅花に縁の薄きを嘆きゐたりしに、旅僧が法華經讀誦の功德によりて、梅の梢に舞ひ戯るといふ胡蝶の曲を作れるの類、わづかに一粒の種子より、數多の美しき花を開かせ、所謂換骨奪胎の妙作をなしたるもの、枚擧に遑あらざるなり。かくの如くして、最初は極めて短きものなりしに、前後を加へ首尾を完全ならしめて、一番の能としたるもあるべく、又は、はじめより趣向を立てて、一番のものに作りたるもあるべけれど、渾然として成りたる能は、實に、一種の光彩を放ちて、神韻情趣、さながら古代錦を見るが如きものあるなり。謠の文章はた、文學とし

尉、姥

て味ふべき價值を有することは、こゝに言ふまでもあらざるべし。

さて、また、能は、必ず物語となるべき人と地と事との三つを具へ居らざるべからず。高砂ならば、名木の松の精なる尉と姥とあり、高砂・住吉の地あり、松の謂れを語り、住吉明神の現れ給ふといふ事ありて、一曲をなし、田村ならば、阪上・田村麿てふ人あり、清水寺てふ地あり、勢州・鈴鹿山の鬼神退治てふ事ありて、一曲をなし、鉢木ならば、佐野源左衛門てふ人あり、上州・佐野てふ地あり、最明寺殿を一泊せさせて、鉢の木を切り火に焚いて煖を取らしめ、後、召集によりて、瘦馬に鞭うち鎌倉に赴き、恩賞を受くることありて、一曲の趣をなすが如

き、これなり。

清次一(一九九四一二〇四五)

既にいへる大和四座の中、結崎は觀阿彌清次よりあらはる。清次、足利氏の寵を蒙り、その子世阿彌元清、業を受けて、極めて其の藝に長じ、また厚く將軍家より眷遇せられぬ。この家を觀世といひ、その流派を觀世流といふ。世阿彌、能の作、極めて多し。尋いで、四座中の圓滿井は今春となり、外山は寶生となり、坂戸は金剛となり、觀世と並びて能の四座と稱せらるるに至り、後に、喜多の一流起りて、併せて五流となりぬ。五流の妙處特點はとりどりにて、一概に、此をよしとし、彼をあしとすべくもあらざるなり。(謡曲評釋)

◎七 俊 寛

ワキ使者
シテ俊寛
*ワキ登場
大赦

ウキ、これは相國に仕へ申す者にて候。さて、此の度、中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦、行はるゝにより、國々の流人赦免ある中にも、鬼界が島の流人の中、丹波少將成經、平判官康頼二人赦免の御使をば、某承つて候間、唯今、鬼界が島へと急ぎ候。

**ワキ退場
***成經・康頼登場

神、（三カ所）成經、康頼、神を硫黄が島なれば、願もみつの山ならん。これは、九州薩摩瀉鬼界が島の流人の中、成經、丹波少將成經、康頼、平判官入道康頼、二人二人が果にて候なり。我等、都に在りし時、熊野參詣三十三度の歩みをなさんと立願せしに、その半に

遠流

勸請

濱木綿

散米

白木綿

御祓

*シテ登場

聞きより

從レ冥入ニ於

冥一（法華經）

も數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も空しくはやなりぬ。せめての事の餘りにや、此の島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の九十九處の王子まで、悉く順禮の神路に幣を捧げつゝ、こゝとても同じ宮居と三熊野の浦の濱木綿ひとへなる、麻衣のしをるゝを、唯そのまゝの白衣にて、眞砂をとりて散米に、白木綿花の御祓して、神に歩みを運ぶなり。
*シテ後の世を待たで鬼界が島守と、地なる身の果の聞きより、シテ聞き道にぞ入りにける。シテ玉兔晝眠る雲母の地、金鶏夜宿す不萌の枝、寒蟬枯木を抱きて、鳴き盡して頭をめぐらさず。俊寛が身の上に知られて候。
康頼「あれなるは俊寛にてわたり候か。これまでは何の爲の

七 俊寛

二九

道迎へ

竹葉

彭祖一堯臣、
經虞夏商周、
壽七百歲。(荀
子註)又、殷の
大夫なりとも
いふ。
ぬれてほす
ぬれてほす山
路の菊の露の
間にいつひ千
年を我は經に
けん。(古今集、
素性法師)「仙
宮に菊をわけ
て人のいたれ
るかたをよめ
る。」と詞書あ
る歌なり。
法勝寺一愛宕
郡岡崎の地に
ありし寺。

御出にて候ぞ。シテ早くも御覽じ咎めたり。道迎へのその爲
に、酒を持ちて参りて候。康頼そも、一酒とは竹葉竹葉は掃の、この島に
あるべきかと、立ちより見れば、や、是は水なり。シテ、これは仰
にて候へども、それ、酒と申すものは、もと、これ、藥の水なれば、
醞酒ナシラフにてなどなかるべき。康頼成經、實に、これは理なり。
頃は長月。シテ、時は重陽。康頼成經、處は山路。シテ、谷水の。三人
彭祖が七百歳を經しも、心を汲み得し深谷の水。
地、飲むからに、實にも藥と菊水の、心の底も白衣カレガシの、ぬれてほ
す山路の菊の露の間に、我も千年を經る心地する。配所はさ
てもいつまでぞ、春過ぎ夏闌けて、また、秋暮れ冬の來るをも、
草木の色ぞ知らするや。あら戀しの昔や。思出は何につけて

法成寺一京都
京極の東、近衛
の北にありし
寺。
なぐるいもま
た一涙川な
水上を尋れけ
ん、物思ふ時の
我が身なりけ
り。(古今集)
ワキ再び登
場

も、あはれ都にありし時は、法勝寺、法成寺、たゞ、喜見城の春の
花。今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや。落つる木
の葉の盃、飲む酒は谷水の、流るゝもまた涙川、水上は我なる
ものを、物思ふ時しもは、今こそ限りなりけれ。
ワキ、早船の心になふ追風にて、舟子やいと勇むらん。い
かに、此の島に流され人の御座候か。都より赦免状を持ちて
参りて候。急いで御拜見候へ。シテ、あら有難や候。やがて、康頼
御覽候へ。康頼、何々、中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行は
るゝにより、國々の流人赦免ある中にも、鬼界が島の流人の
中、丹波少將成經、平判官入道康頼、二人赦免ある所なり。シテ
何とて俊寛をば讀み落し給ふぞ。康頼、御名はあらばこそ。赦

公の私

きをふりすてて、二人は船に乗らんとす。ワキ、僧都は船に叶ふまじと、さも荒けなく言ひければ、シテうたてやな、公の私といふ事のあれば、せめては、向ひの地までなりとも、情に乗せてたびたまへ。ワキ、情も知らぬ船子ども、艫權をふりあげ打たんとす。シテさすが命の悲しさに、復立ち歸り、出船の纜にとりつき引きとむる。ワキ、舟人纜押



とむる。

佐用姫―大伴狹手彦の妻。

聞くや如何に―聞くやいかに、うはの空なる風だにも、まつに音するならひありとは。
(新古今集、宮内卿)

し切つて、船を深みに押し出す。シテせん方波にゆられながら、唯、手を合せて船よのう。ワキ、船よといへど乗せざれば、シテ力及ばず、俊寛は、地もとの渚にひれ伏して、松浦佐用姫も、我が身にはよもまさじと、聲も惜しまず泣き居たり。ワキ成經康頼の三人、痛はしの御事や、我等都に歸りなば、よき様に申し直しつゝ、やがて歸洛はあるべし。御心づよく待ち給へ。シテ歸洛を待てよとの呼ばはる聲もかすかなる、たのみを松蔭に、音を泣きさして聞きゐたり。三人聞くや如何にと夕波の、皆聲々に俊寛を、シテ申し直さば、程もなく、三人必ず歸洛あるべしや。シテそれは眞か。三人なかくに。シテ頼むぞよ。頼もしくて、地待てよ待てよといふ聲も、姿も、次第に遠

ワキ等三人
退場
シテ退場

アド 殿
シテ 從者

折檻

ざかる沖つ波の、かすかなる聲絶えて、船影も人影も消えて見えなくなりけり。あと消えて見えなくなりけり。（謡曲）

八 富士松

大止

アド、一人出でて、「罷り出でたるは、あたりの者で御座る。一人召し使ふ者が、暇を請はず、何方へやら參つた。承り候へば、富士禪定をして、夜前歸つたとは申せども、未だ罷り出でぬ。某參つて折檻致さうと存ずる。いや、程無う、彼の私宅は、これで御座る。某の聲と聞いたならば、定めし不在をつかはう程に、作聲をして呼ばう。物も御案内。」シテ案内とは誰ぞ。といひて出づ。さて、主を見つけて迷惑す。主怒り、アドおのれは主に暇をも請はず、何

権現

善悪

方へ往た。シテ一人ある下人の事、御座れば、御暇は下されまじいと存じて、忍うで富士禪定致して御座る。アド折檻をせうと思へども、富士禪定といふ程に権現の御罰が恐しい。やい、其所な奴起ち上れ、宥す。シテあら、心安んやんの先づ此方へ通らせられい。アドいや、歸らう。シテ先づ入らせられい。アド、座敷に入り、汝が富士禪定した事は知つたれども、心を見る爲にいうた。又、見事な富士松を取つて來たと人がいふ、見せい。シテいや、取つては參りませぬ、嘘で御座る。アド確かに聞いた。善悪見せい。シテ、その時障子を明くる意にて、「この松で御座る。」アド「一段と見事な、是をくれい。シテこれは、人の預け物で御座る。」アド「かへ物にはならうか。シテ物によつてなりませう。」

驪

アド「大方聞えた、たゞ取るも如何ぢや、さあならば驪の馬と換へう。」シテ馬などは置所も御座りませぬ。アド「鷹と換へうか。シテ鷹もいりませぬ。」といひ、「先づ御酒を一つ進上申さう。」とて立ちて、「やいやい、頼うだ人の御出ぢや、御酒を出せやい。」無い。―取りにやれ。―代りが無い。―先づその裕なりとも代りにやれ。アド「やいやい、太郎冠者、想ひ出した事がある。汝も好ぢや程に、俳諧をして、身が爲勝つたらば、あの松を取らうず、爲負けたらば取るまい。」シテそれは恐物で御座れども、畏つて御座る。アド「汝發句せい。」シテ客人發句に亭主脇と申す程に、先づ御前に御發句を。アド「手に持てる土器色の古裕。」シテ立つて、「今、酒の無い事を聞かせられて、御發句になされた。

取らうず

脇

山王

物を聲高にないつそ。といひ、又下に居て、「さげごとにあるつぎ目なりけり。」アド「序ながら、山王へ參らう程に、道すがらせう。」といひて、立ち歩みつゝ、「あとなる者よ、暫し止まれ。」シテ下に居る。アド「これも、句ぢや。」シテ立つ。以下、歩みながら句をいふなり。シテ「ふたりとも渡れば沈む浮橋を。」アド「上もかた／＼下もかた／＼。」シテ「空木の本末た／＼く啄木鳥。」アド「下もかた／＼上もかたかた。」シテ「三日月の水にうつろふ影見れば。」アド「奥山に船漕ぐ音の聞ゆるは。」シテ「四方の木の實や、引み渡るらん。」アド「西の海千尋の底に鹿鳴けば。」シテ「鹿子斑に立つは白波。」アド「をさなければも屈みこそすれ。」シテ「海老の子が生るゝよりも親に似て。」アド「圍爐裏の中に船や漕ぐらん。」シテ「薄たくその

空木

鹿子斑

花ずり衣

綿帽子

火ノおき中のにほの見えて。アト袋は空に二つ舞ひけり。シテ大黒と布袋は鳶に攫まれて。アト山吹の花ずり衣主は誰そ。シテ問ふに答へぬ梔子の花。アト緑青塗りし佛とぞ見る。シテ蓮の葉の青きが上の青蛙。アト飛ぶ白鷺は雪に紛へり。シテ年よりの白髪に紛ふ綿帽子。アト黒き物こそ三つ並びけれ。シテ中は子か、兩の端なる親鳥。アト山王の御前ぢや。といひて拜みて、御前で一句参らう。山王の前の鳥居に丹ニを塗りて。シテ赤きは猿のつらぞをかしき。アト刀のそりをうちて、身どもが赤み上戸は隠れもないに、飲まうとも言はぬ酒をくれて、色に出たがをかしいか。シテそれは迷惑で御座る。最前からの御句に、青い物も黄な物も白い物も遊ばされたによつて、さ

當句
螻蛄
鶉

ては、五色をなさるゝと存じて、猿を附けて御座る。殿様のおつらの事では御座らぬ、猿の御顔の事で御座る。アト物を悪くうぬかす、干句に一句で参らう。といひて背を打ち、是は何ぞ。シテ當句では御座らぬか。アトはつといふ聲にもおのれ怖ぢよかし。シテ螻蛄腹立つれば鶉喜ぶ。アトあの悪くい奴。

(狂言)

九 福原落

さる程に、平家は、福原の舊里にして、一夜をぞあかさされける。をりふし、秋の月は下の弦なり。深更空夜静かにして、旅寐の床の草枕、露も涙に争ひて、唯物のみぞかなしき。

里内裏

いつ歸るべしともおぼえねば、故入道相國の造り置き給へ
 る福原のところどころを見給ふに、春は花見の岡の御所、秋
 は月見の濱の御所、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども、五條
 大納言國綱の卿の承つて造進せられし里内裏ついでに、あつたところ、いづれもい
 づれも、三年が程に荒れ果てて、舊苔道を塞ぎ、秋の草門をと
 ち、瓦に松生ひ垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり、松風のみや
 かよふらん。簾たえゆかたえゆかあらはなり、月影のみぞさし入りけ
 る。

尾上

すだく

明けぬれば、福原の内裏に火をかけて、主上を始めまるらせ
 て、人々皆御船にめす。都を出でしほどこそなけれども、これ
 も、名残は惜しかりけり。海人の焼く藻の夕煙、尾上の鹿の曉
 の聲、渚々に寄する浪の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく
 蟋蟀、すべて、目に見耳にふるゝことの、一つとしてあはれを

催し心を傷ましめずといふ
 ことなし。

昨日は、東關の麓に轡をなら
 べて十萬餘騎、今日は、西海の
 波の上に纜を解いて七千餘
 人、雲海沈夕として、青天既あまのに
 暮れなんとす。孤島に夕霧隔



琵琶法師

極浦

てて、月海上に浮べり。極浦の波をわけ、潮にひかれてゆく船
 は、半天の雲に溯る。日數経れば、都は山川程を隔てて、雲居の

右の形あり

九 福原落

外にぞなりにける。はるばる來ぬと思ふにも、唯、盡きせぬものは涙なり。壽永二年七月二十五日に、平家都を落ち果てぬ。

(平家物語)

一〇 人道

高山林次郎

流轉
觀ず

世事の常なくして、人生の長へに流轉するは、苟も生を觀じ世を念ふ人の、容易に認むる所なるべし。然れども、一たび皮相の見を離れ、熟、沈思熟考すれば、人生は、偶然徒爾なる事件によりてのみ成るものにあらずして、必ず、常住不易なる或るもののその間を貫通せるを見ん。而して、更にこれを諦視し、洞察し、具に其の幹枝を尋究すれば、前に偶然なりと想は

歲時
方處

れしものも、多くは、避くべからざる必然の徑路を經過して、各、その始終を遂げたるものなることを發見すべし。更に、また、縦に歲時に繋け、横に方處に涉り、古今東西の史乘に照して、審かに人生興廢の跡を察すれば、この常住不易なる或るものは、萬千不同の世事を綜べ、殺活喜憂の樞機を握り、己に反するものはこれを斃し、己に順ふものはこれに幸し、成敗著落の跡、今にしてこれを見れば、儼として、一絲の増減を容さざることを悟了すべし。

人類は、あらゆる生物と共に、偶然にして生息するものにあらず。或る最終の目的に向ひて精進するものなることは、これを過去の歴史に鑑み、これを現在の状態に察し、炳焉とし

動機

て争ふべからざる事實なり。抑、何者が吾人に此の如き進歩的動機を與へたるか。何故に、吾人は、この最後の目的に向ひて、不退轉の精進を爲さざるべからざるか。將、又、この最後の目的は如何なるものなるか。此の如きは、今日に於ける人智の能く説明する所にあらずと雖も、兎にも角にも、斯の如き進歩的動機の人性中に存在すること、また、人間の諸の歴史は、所詮、この動機の活動に驅られて、最後の目的に到達せんとするの盡力に外ならざること、疑を挾むべからざる所なり。

現實化

人間社會にありて、所謂人道てふものは、個々人の内性に存在せるこの進歩的動機の必然なる合成力にして、その目的は、人類全體の發達を催進し、以て、その理想を現實化するにあり。故に、人道は、その起源よりしてこれを觀れば、もと、個人の性格を外にして存在するものに非ずといへども、しかも、一たび、人道として存在したる以上は、その成立の目的を遂げんがために、個人に對して、絶對の制裁力を有するに至る。既に、人道は、人類全體の發達を目的とするを以て、個々人の生活に對して偏愛する所なし。唯、己に順なるものに幸するのみ。

若し、個人の行爲にして、人道に衝突し、若くは背反したる時は、たとひ、一旦の僥倖を得とも、竟に自家覆滅の禍を免れざるなり。若し、また、個人の行爲にして、人道に合致する時は、た

とひ、一時の不幸を見るも、竟に永遠の勝利者たるべきなり。今、運命てふ語を假りてこれをあらはさば、人類の進歩的動機は根原的運命なりといふを得べく、その人道に顯れたるものは大いなる運命、その個人の性格に顯れたるものは小なる運命といふを得べし。而して、小なる運命は、大いなる運命に従はざるべからざるなり。(樗牛全集)



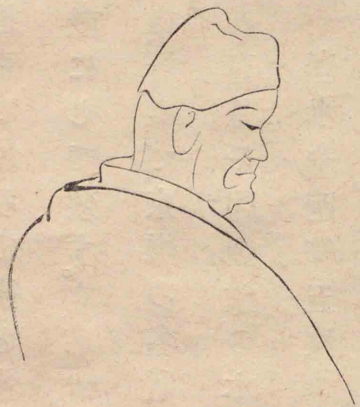
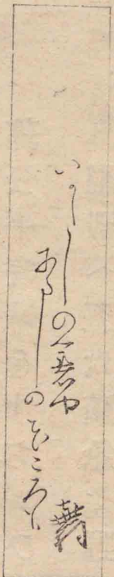
與謝蕪村

藤岡作太郎

芭蕉既に歿し、門下の俊秀、各、その好む所によりて、説を立て、彼此對立して統一を失ふに至り、且、俳諧の行はるゝこと、益、廣きにつけて、宗匠の時好に投じ、世俗に阿るあり、年を経る

最たり

に隨うて、風調甚しく下りゆきぬ。天明の頃に及び、この墮落を慨して、俳道の革新を唱ふる者、東西に起れるが中に、京の



蕪村肖像及筆蹟

蕪村、實にその最たりき。蕪村は、俳人にしてまた畫人なり。その畫、神韻を本とし、形似を末とす。句は、また畫法と共に奇抜にして、しかも、神韻縹緲たり。桃青と相竝んで、斯道の二聖とすべし。

蕪村は與謝氏、本氏は谷口、名を長庚といひ、後、寅と改む、字は春星、蕪村、夜半亭等の號あり。攝津の人、幼にして母の生家に

月溪筆

早野巴人
其角門、江
戸の人。寛
保二年(二
四〇二)歿
す。

*山城國葛
野郡妙光寺
の山上に在
り。

鳥羽殿―山
城國紀伊郡
衆徒

養はる。その家、丹後國與謝郡に在り。後年、與謝氏を名のれるは、これがためなり。長じて江戸に赴き、俳諧を早野巴人に學び、後、京に住みて畫と俳とを以て世に立てり。天明三年六十八歳にして歿す。

蕪村、好んで、京畿の名所及び古代の風俗を詠ず。例へば、

春月や印^{*}金堂の木の間により

春水や四條五條の橋の下

郭公平安城をすぢかひに

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

此の如きは、山紫水明にして、また、千年の歴史ある舊都の地

に住みたればなるべし。されど、その畫はこれに異なり。蕪村

の特色は、新に漢畫を起せるにあり。されば、その俳諧に屢、漢

語を用ゐしは、正に、その畫法と相應するものと謂ふべし。

寒月や枯木の中の竹三竿

霜百里舟中にわれ月を領す

詩人にして且畫家なるもの、その所詠の畫趣あるが少から

ざるは、當然のことなり。

牡丹散りてうちかさなりぬ二三片

柳散り清水涸れ石處々

一行の雁や端山に月を印す

蕪村が畫道の功も、敢へて俳諧に譲らず。されど、彼の畫家と

彭百川—彭城百川、尾張の人、京都に住す。寶曆三年(二四一三)歿す。年五十六。

俳畫



田能村竹田

しての聲價は、歿後に至りて愈々高くなりぬ。その畫、或は彭百川に學べりといへど、自ら稱して、吾に師なし、古今の名畫を以て師とす。といへり。その元明諸大家の遺墨を研究して、一家を成せること、推して知るべし。蕪村の畫く所、減筆の粗畫多く、また、好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫く。運筆簡にして、狂兒戲の如くにして、しかも趣味津々たり。屢々題するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は、實に、この翁に至りて興りしなり。然れども、蕪村の作品は、唯、この種の粗畫のみにあらず。緻密なる山水等の畫、また固より存す。而して、その畫を作るや、一室に籠りて人の入るを禁じ、獨坐して思を凝せりといふ。田能村竹田、蕪村を評して曰く、用筆傳彩、全然

—豊後の人、天保六年(二四九五)歿す。年五十九。

品隲

明人のごとし。布置點景、これを邊邑僻境有る所の寔景に取る。故に、景は新に、法は古く、意を用ゐること最も深し。高名の下、虚士なしとは、洵に誣ひざるなり。と。世人、或は彼の密畫を俗氣多しといふ。しかも、泛々たる世人の褒貶は取るに足らず、名流竹田の品隲は、以て、蕪村の價を定むべきなり。蕪村の門下に、松村月溪あり。月溪、畫道の門人なりと雖も、亦俳道に遊べり。

花踏んで雛にかくる、鼠かな
南より風吹く藤のくもりかな

月溪、某年、事によりて、攝津吳服の里に隠れ、こゝに春を迎ふ。よりて、氏を吳、名を春と稱す。後、應舉の風を慕ひて、その門人

莫逆の友
天明八年

たらんことを請ふ。應舉辭して曰く、吾いかで君が師たるに堪へんや、唯、俱に學び、俱に勵むべきのみ。」と。よりて、莫逆の友となる。天明の火災の後、應舉と同居し、畫道を討論して、竟にその奥旨を悟れりといふ。かくて、蕪村の風を一變し、好んで寫生をなして、一家の面目を開く。その家、京都四條にあり、世人、その風を四條派と稱す。文化八年、六十歳にして歿す。

(近世繪畫史)

一一三 木 枯

木枯乃果そありけり海此音
木枯や何小世とさる家五軒
燕村

董

波

魯

太

臺

更

規

桐

碧

梧

桐

阿 佛 尼

一一三 いざよふ月

むかし、壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の

一一三 木 枯 一一三 いざよふ月

五五

魚の若玉十三年
孔子の厨壁を看す

晴る、日や雲霞貫く雪此富士

冬あきの里を見れば海は峠り歌

山風や霰ぬた大望馬の耳

をを志火を見れば風は里夜の雪

曉や鯨の吼も海霜乃海

枯蘆の日よ日小折れて流れたり

降りる雪や雪に灯ともる峰の寺

芒枯れて溜る水積みや高よ

此の枯れ木は又花のありは何れか

海ありては木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

木枯れは海は此音

さてしも
やるかたな
し

もや

人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな水莖
 の岡の葛の葉かへすがへすも書き置く跡たしかなれども、
 かひなきものは親のいさめなり。又賢王の人をすて給はぬ
 政にももれ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは、數な
 らぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又、さてしもあらで、
 なほこのうれへこそやるかたなく悲しけれ。
 更に思ひつづければ、やまとうたの道は、唯誠少く、あだなる
 すさびばかりかと思ふ。人もやあらむ。田の本の國に、天の窟
 戸開けし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め
 物を和ぐる媒となりけるとぞ、この道の聖たちはしるし
 置かれたりける。

*藤原爲家、
 寶治中、續
 後撰集を撰
 し、正元中、
 續古今集を
 撰す。
 三人のを
 のこゝろ爲
 顯・爲相・爲
 守。
 えに

細川―播州
 細川莊。

龜の鑑

さて、また、集を撰ぶ人は例多かれど、二たび勅をうけて、世
 世に聞えあげたるは、たくひ猶ありがたくやありけむ。その
 あとにしも携りて、三人のをのこども、百千のうたの古反
 故どもを、いかなるえにかありけむ。預りもたることあれど、
 「道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。」とて、深き契を結び
 おかれし細川の流も、故なくせきとめられしかば、後とふ法
 の燈も、道を守り家を助けむ親子の命も、諸共に、きえを争ふ
 年月を経て、危く心細きものから、何として、つれなく今日ま
 では存ふらむ。惜しからぬ身一つは、やすく思ひすつれども、
 子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく、道を顧みるうらみは、や
 らむ方なく、さて、なほ、あづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ

*建治三年
(二五九)十月
十六日
降りみ降ら
ずみ―神無
月、降りみ
降らずみ定
めなき時雨
ぞ冬のはじ
めなりけ
る。(後撰集)
人やりなら
ず

影もやあらはるゝとせめて、思ひ餘りて、萬の憚を忘れ、身を
えうなきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月にさ
そはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

頃は、み冬たつはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ、
時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れ散り
つゝ、事にふれて、心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、
いきうしとてもとゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立
ちぬ。(十六夜日記)

一四 昨日は今日の昔

本居宣長

昨日は今日の昔にては、かなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中

いけらん
よごもる

いたり
かぞまふ、
かぞふ

をつくづくと思へばあはれわが世もいくほどぞや手をを
りてかぞふればはやみそちにもあまりにけり命長くて七
十ち八十ちいけらんにてだにはやくなかは過ぎぬるよ
と思へばまだよごもれるやうなる身もゆくさき程なきこ
こちのして心ぼそくぞおぼゆる
かくのみはツマナク心なき草木鳥獸の同じつらになにすと
しもなくあかしくらしつゝ、生ける限りのよをつくして徒
らに苔の下にくちはてなんはいとくちをしくいふかひな
かるべきことと思ふにもよろづにいたり少く拙き身にし
あれば何事をしいでてかは世の人にもかずまへられなか
らん後の世に朽ちせぬ名をだにとゞめましといとゞ人に

はふらかす

ゆゑづく

あいなだのみ

雨森芳洲より宣藏主におくりし書翰。

似ぬおろかささへとりそへてぞ悲しく心うかりける
 さりとてはた身をえうなきものにはふらかしはつべきに
 しもあらずかくのみ拙くおろかなる心ながら何わざにも
 れ怠りなくわざと心にいれてつとめたらんにつひにはひ
 とつゆゑづけてな^{スルユトカ}のめにしいづるふしもなどかはなから
 んとあいなだのみにかゝりてなん(鈴屋集)

一五 千遍讀

雨森 芳洲

舊歲御狀相達し、御返書未だ仕らず候うち、新歲の芳翰又々相達し、忝く拜見仕り候。彌、御堅固に御重歲なされ候由、欣慰この御事と存じ奉り候。此許相變らず、私儀無爲に罷在り候。

商量

兩度共に御佳作御見せ下され、諸々、御上京以後、別して、御精出され候御事に御座候や、格別に御上達なされ候様に存じ奉り、珍重之に過ぎず候。詩は、做多、看多、商量多。と申候。兎角多く御作りなされ、上手に御なりなさるべく候。商量の字、まづは、人と相談することを申候へども、人と相談いたすばかりにてはこれ無く、心を以て心に問ひ、我が心にて思案する事も商量と申候。俗話にも、人の申す事を承り、思案致し御返事申すべく候と申候時は、待我商量回話と申候。和韻致し進じ申候様に仰せ下され候。此許御逗留中は、一時の御挨拶と存じ、悪詩も作り申候へども、上方までは恥かしく御座候てのぼせ難く御座候。それ故、和韻をば仕り申さず候、御宥恕下

繁右衛門
古川氏方
久、對馬の
國老。
平仄

老耄
閻羅王
勾死鬼

さるべく候、こゝに一つをかしき話御座候故、書きつけ御目
にかけ候、御笑ひ下さるべく候。

去年より繁右衛門など皆々寄合ひ、歌の會を致し、聞々、私其
座へ参り候事も候へば、私にも、是非歌を讀み候へと申候へ
ども、詩は平仄なりと習ひ覺え居り候へど、歌は、つひに、百人
一首の講釋をも承りたる事も御座なく、かな、けりらむ一つ
も埒は明き申さず候。その上、歌詞としては、尙々存じ申さず候
に付、古今千遍讀と申す願を心に立て申候て、最早百五十遍
は昨日迄に讀みおほせ申候。今迄の積りに致候へば、八十四
の七月に千遍の數滿ち申候積りに御座候。其間に老耄致候
か、又は、閻羅王より勾死鬼など遣し申され候はば、仕るべき

様もこれなく候へども、まづは、願を滿し候心に御座候。右千
遍讀み候ひて、さて歌をよみかゝり候心に御座候。是は壽命
の事はわきにのけ置きての分別に御座候へば、さりとは、を
かしき事に御座候。併し、私最早世間に望ある者にもなく候
へば、かく致し死を待ち候も一奇事と存立候事に御座候。此
段書きつけ御目にかけて候は、老人だにかく存候事に御座候
故、皆様にも御年少に御座なされ候へば、なほなほ徒らに御
暮しなされざるやう申上げたたく、此の如くに御座候。同志の
御面々へ、御參會の節、此旨御傳へなされ下さるべく頼み奉
り候。申したき事も御座候へども、老筆堪へ難く、早々貴答に
及び候。餘は後音を期し候。恐々謹言。

一六 壬子試筆の詞

室 鳩 巢

白駒の隙
黄金の術

老の波

痿疾

下帷發憤
讀書三年
不窺園
(漢書、董仲舒傳)

程朱の道

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎ易く、衰病日に犯して、黄金の術成り難し。されば、犬馬の齡、これまであるべしともおもはざりしが、いつしか、老の波より來て、今年七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶとにあらねども、この三とせ、春の園を窺ふこともかなはねば、園の中ながら梢に傳ふ鶯の音に、殘の夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學の窓に年を経るかひありて、程朱

鄒魯の風
韓歐が文
邯鄲の歩

*不義而富
且貴、於我
如浮雲。
(論語)
**禍之與
福分、何異
糾纏(漢書
賈誼傳)
三綱

の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寐覺も慰みぬべき。

さても、多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互にゆきかふをば、夢とやいはん現とやいはん。まことに、富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如しといへるに何か違ふことあるべき。中に、たゞわが聖人の立てたまへる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。

然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利慾にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆく

風教

蚍蜉***撼***大樹***可***笑***自不***量***。(韓退之)

發鳩之山、有***鳥、曰***精衛、常取***西山之木石、以填***東海。(山海經)

前修

こそなげかしけれ。もとより、いやしき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに、蚍蜉の樹を撼かし、精衛が海を填むるに似たるべし。さはいへど、わが儒分内のことなれば、これを度外に置くべきにもあらず。よりにて思ふに、世に、老師宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいまゝにし、又は、他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそうけられね。たゞ、務めて、新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人の所謂曲學阿世とは、是等をいふなるべし。よし、人はさもあらばあれ、よし、風俗は昔にあらざるなりぬとも、わが身一つはもとの如く、仁義の道をまもり、たゞ、前修の

おのがとし

模範を失はじと思ふこそ、せめて、儒となりししるしともいふべけれ。然るに、あらたまの春のはじめとて、人は、皆、おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我は、ただ、五常の道に心をよせて、いつもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなん筆を試みるものならし。(駿臺雜話)

一七 宇治川先陣

さる程に、熊谷直實、大音揚げていひけるは、抑、この宇治河固めたる輩、木曾殿の入魂の郎黨にはよもあらじ。一旦、附き従ひたる人どもにこそあるらめ。命は惜しき習なり。詮なき合戦に與力して、大事の命失ふな。落ちば助けん。といふ儘に、引

入魂

*平山季重、
佐々木定綱、
澀谷重助、
熊谷直實、
息子直家。

はだばかま

き取り引き取り放つ矢に、木曾殿の郎黨に、藤太左衛門尉兼助といふ者、逆さまに射落されけり。是を始として、水練の者あらば防矢射んとて、五人進み寄つて散々に射ければ、多くの郎黨、或は手負ひ或は討たれけり。その間に、佐々木が郎黨に、常陸の國の住人鹿島與一とて無雙の水練あり。鎧脱ぎ置き、はだばかまをかき、腰には鎌をさし、手には熊手もちて、河の底に入り、良、久しく沈みくぐりて、亂杙、逆茂木引き落し、大綱、小綱切り棄てけり。實の器量と見えたりけり。されども、未だ河を渡す者はなし、如何あるべきと、評定様々なりけるに、畠山庄司次郎重忠進み出でて申しけるは、事新し、この河は近江の湖の末、今始めて出來たる河にあらず。春立つ日影

の習にて、細谷川の氷解け、比良の高嶺の雪消えて、水の嵩は増せども、水の減ずることあるべからず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御謀叛の御時は、渡せばこそ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも評定の有りしは是ぞかし。始めて、驚くべき事に非ずかねての馬用意のことなり。重忠渡して見參に入れん。といふ處に、平等院の小嶋が崎より、武者二騎かけ出でたり。梶原源太と佐々木四郎となり。

景季が装束には、木蘭地の直垂に、黒革緘の鎧に、三枚冑の緒を締め、滋籐の弓を中を取り、二十四さしたる小中黒の矢負ひ、練鐔の太刀佩いて、鎌倉殿より賜はりたる磨墨といふ名馬に、黒塗の鞍置いて騎りたり。高綱は、褐の直垂に、小櫻を黄

木蘭地
三枚冑
小中黒
練鐔
小櫻を黄に
返したる鎧

笛籐
し打
噴物造
黄覆輪

に返したる鎧に、鉞形打つたる冑に、笛籐の弓の眞中取り、二
十四さしたるいし打の征矢、頭高に負ひ、噴物造の太刀佩い
て、是も、鎌倉殿より賜はりたる生唆に、黄覆輪の鞍置きてぞ
騎りたりける。

誰か先陣と見る處に、源太颯とうち入りて、遙かに先だちけ
り。高綱いひけるは、如何に源太殿、御邊と高綱との外に人な
ければ、かく申す。殿の馬の腹帯は、以ての外に窶ゆるつて見ゆる
ものかな。此の河は、大事の渡なり。河中にて鞍踏み返して、敵
に笑はれ給ふな。といひければ、さもあらんと思ひて、馬を駐
め、鐙踏ん張り立ち上り、弓の弦を口に噉へ、腹帯を解いて、引
き締め引き締めしける間に、高綱さつと打渡して、二段ばか

逸物
矩に渡す

り先だちたり。源太、たばかられけり。と、安からず思ひて、是も
打浸して渡しけるが、馬の脚、綱にかゝりて、思ふ様にも渡さ
れず。高綱は、倔強の逸物にも乗りたれば、宇治川はやしと雖
も、淵瀬をいはずさざめかして、矩に渡し、向の岸近くなりて、
高綱が馬、綱に懸つて脚をさと歩み除きければ、元より期す
ることなれば、太刀を抜き、大綱、小綱三筋さと切り流し、向の
岸へ打上り、鐙踏ん張り弓杖ついて、佐々木四郎高綱、宇治川
の先陣渡したりや。と名乗も果てぬに、梶原源太も、流れ渡り
に上りにけり。

源太、佐々木、鎌倉へ早馬を立つ。何れも、劣らじ負けじと馳せ
て行く。源太の早馬先だちたりけるが、如何したりけん、足柄

の中山にて、高綱が早馬先だちぬ。三日と申すに馳せ着いて、高綱宇治川の先陣と申したり。同時に、梶原が使亦來つて、景季先陣と申しけり。右兵衛佐殿は、安立新三郎清恒を召して、「佐々木・梶原生きたりや」と問ひ給へば、「共に候。」と申す。その後は、尋ね給ふことなし。後日の注進に、宇治川の先陣は高綱と注されたりけるを見給うてこそ、言と心と相違なしとはのたまひけれ。(源平盛衰記)

一八 桃山時代の美術

濱田耕作

足利氏の末葉より、徳川家光が鎖國の令を發せしまでは、古來、我が國に罕なる世界的交通の行はれし時代にして、國民

手法
因襲
崛起
這般

輪奐
雄渾

の思想界は、足利末期より、社會的・政治的規律の荒廢に伴なひて空前の自由を得、彼等の眼界は一時に擴大したり。桃山時代は、實に、この世界的思想の横溢、その頂點に達せんとする時期なりしなり。此の如き時代に産出したる藝術が、その氣局宏大にして、豪放大膽の手法を發揮し、何等の因襲に拘束せられざるは、固より自然の勢のみ。太閤秀吉は、この時代の精神を具體化して崛起せる英傑なりき。かくて、彼はその個人的性格によりて、益、這般豪放雄偉の精神を助長せしなりけり。

秀吉は、天正十一年を以て大阪城を築き、翌年を以てこれを完成せしが、その規模の壯大なる、輪奐の雄渾なる、遠く從來

の城塞に絶せり。その翌十三年には、更に京都内野に聚樂の第を營み、三年を経て落成せしかば、天皇の行幸と上皇の御幸とを請ひ、豪華の遊を極めぬ。また、十四年には、洛東に大佛殿をつくり、十六年に至りて竣工し、方廣寺と稱しぬ。更に、文祿三年には、伏見桃山に、宏大なる城廓と壯麗なる宮殿とを營み、屋瓦に塗るに金を以てするに至れり。斯の如く、大工事に次ぐに大工事を以てして、殆ど寧歲なく、京都は、四方の民人聚りて殷富を加へ、國庫の財寶は、洽く下層の工匠に頒たれ、豪放の氣象は一般に普及しぬ。しかも、這般の經營に従つて、これと隨伴せる各種の藝術は、勢ひ急速の進歩を遂げざるを得ず。桃山時代の美術は、實に、此等の大土木の必要に促

されて發達せるものにして、その藝術の性質も、また、これによりて、その大部分を規定せられたるを見たり。

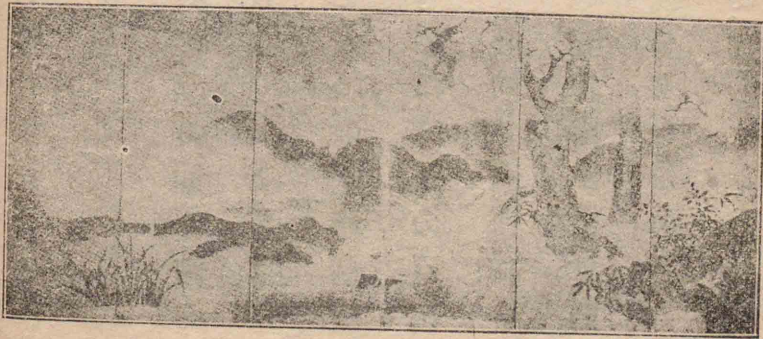
悲劇

さはれ、豊臣氏の榮華は、太閤の薨去と共に、夢の如く消えぬ。大阪の陣は、彼の薨後二十年を出でずして起れり。太閤の遺孤は、千秋の悲劇を貽して滅びぬ。かくて、大阪の堅城は破壊せられぬ。太閤當年の雄圖を窺ふべきものは、唯、その巨石の殘壘あるのみ。尋いで、聚樂桃山の巨構も破壊の悲運に會しぬ。金殿玉樓、今はた何の見る所ぞ。塗金の瓦片、纔かに、往時の面影を語り、數尺の遺壘、唯、行客の心を傷ましむるのみ。方廣寺の大佛殿も、今は洛東の一奇觀として、空しくその外廓の巨石を剩せるのみ。而して、當代の遺品は、その數多からず、又、

完璧

完璧のもの、少きに拘らず、吾人に向つて、桃山藝術の特質を殆ど遺憾なく指示し、時代精神と英雄の行爲とが、如何に、著しく、その藝術に影響せるかを知らしむるものあり。

今、當代の建築物に就きて、略、通有の特質を擧げんか、まづ、第一に注意すべきは、その建築が、最も適當に、且、十分に、繪畫・彫刻を應用せること、換言すれば、建築・繪畫・彫刻の三美術が、最も親密に協同せること、これなり。その豪放奇拔なる手法と意匠とより成れる彫刻・繪畫

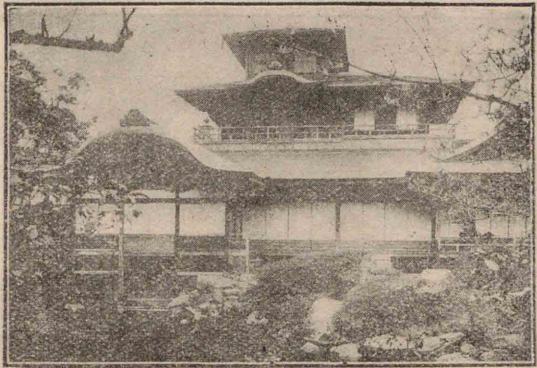


桃山風屏

放膽

倅しく

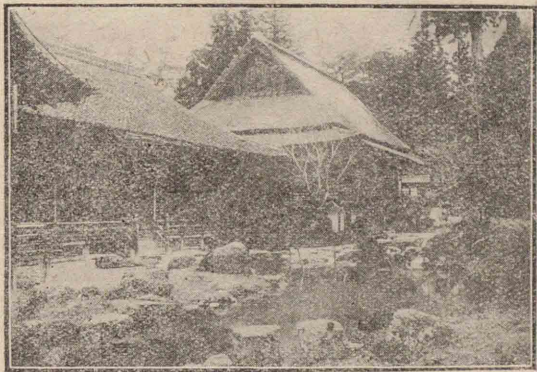
- *狩野永徳 一〇二二〇
- 三一二二五
- 〇
- **狩野山樂 一〇二二一
- 九一二二九
- 五
- ***海北友松 一〇二二一
- 九三一二二
- 七五



が、雄大の趣味を發揮して、如何に、善く、その高壯なる建築物に相應せるかを見よ。此等の各細部が、遺憾なく、當代的世界的・平民的・放膽的の趣致を示せるのみならず、その各部が、城廓的建築の要求する各條件に向ひ、己を犠牲として、如何に、倅しく、その職能を盡せるかを見よ。彼の永徳・山樂・友松等の一派の畫家は、この必要に應じて、特異の手法を出し、一種の裝飾的繪畫を作れるなり。

次に、此等の建築物は、武家風と公卿風との融合せられた

るものなることを注意すべし。桃山・聚樂等が、一種の城廓に
てありながら、その内部に宮殿的建築を具備せることは、已



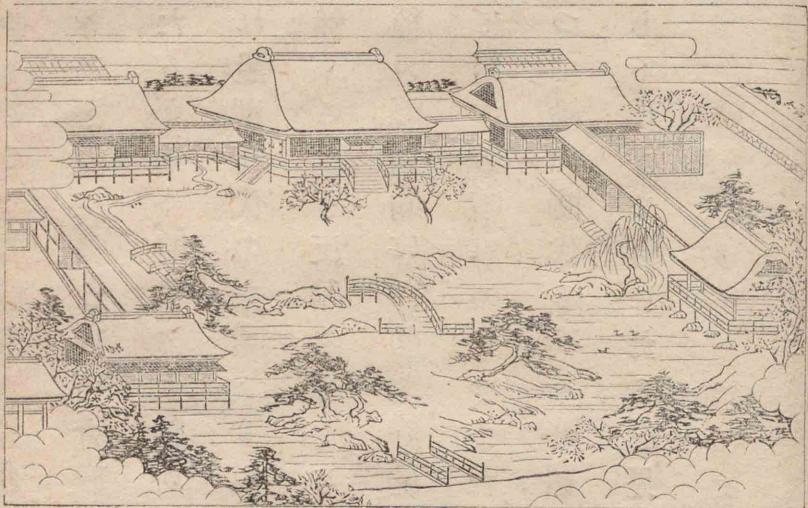
書院
寢殿造り

りの遺韻を隨所に發揮せるものなり。公卿風と武家風との
混和は、はやく室町時代に端緒を見ると雖も、その完全なる

三寶院

に、根本的に、兩者の融合を示すもの
なれど、その建築物の個個に於ても、
大いに兩者の混融を現せり。即ち、彼
の西本願寺の飛雲閣の如き、醍醐の
三寶院の如き、いづれも、宮殿の趣致
と書院の様式とを結合せしものに
して、特に、後者は、藤原時代の寢殿造

狩野風
土佐畫
濃麗



藤原時代寢殿造り建築

結合は、桃山時代に至りて、始
めて認め得る所なり。繪畫に
於ても、山樂・永徳等が、よく武
家の好尚に適へる狩野風墨
畫の手法と、公卿風なる土佐
畫の濃厚濃麗なる彩色とを
融合せるは、豊太閤が、執柄の
後、漸く公卿の態度と生活と
を學べる事實を反映せるも
のに非ずして何ぞ。更に、一面
よりこれを觀れば、建築を中

綜合

心とせる他の藝術の綜合や、公卿風と武家風との融合や、此等のものは、彼の秀吉が、政治的に社會的に、統一綜合を企てたるが如く、時代の大精神を具體化するものに外ならず。これ、足利時代の末葉より混亂分裂せる日本の社會に於て、當然來るべき反動なりしなり。さはあれ、前代より繼承せる別種の藝術的好尚、即ち禪的茶室的趣味、例へば淡泊なる墨畫に對する嗜好の如き、また決して衰亡せるものにあらず。却つて、桃山時代の豪華莊麗なる精神に對し、好箇の清涼劑として愛好せられたるを見るなり。

好尚

一九 霞

足代弘訓

つゆむ

この頃までは、漕ぐ舟のゆききにさはりし入江の氷も、いつしか、名残なうとけわたりて、汀の蘆のつゆむそめたるものどけきに、かなたの岸の柳の繪にかきたらんやうにうちかすめるものから、さすがに、あるかなさかの春風になびくさまの、ほのぼのと見ゆるもをかしく、まして、こゝもとなる海士の軒端に、おはぬさまなる梅の花の、るみひらけたるが、なつかしう袂に匂ひくるなど、めづらしうもあはれにも、いはん方なき心地ぞせらるゝ。(海士の囀)

おふ

二〇 柳の北京

坂本健一

人ありて、燕京春夏の風光を問はば、予は、唯、楊柳の春ありと

蒙駝

青陽

褪す

五風十雨

答へん。こゝにも、さすがに、桃李の咲かざるにはあらねど、多くは、名門邸裏に春を藏し、蒙駝苑中に妍を發するのみ。既に、花の紅なるなし、せめて、青山綠水の眺あらばこそ青陽の春ならめ。これまた、南地の文にして、こゝには、唯、赭山の禿げたる、褐水の濁りたるまゝに春を迎へて、眼底に映ずる色彩は、幾年の沙塵に褪せし樓閣の金碧あるのみ。

長き冬に次ぐに遅き春を以てし、遅き春の季は極めて短く、かくて、首夏の節に入る燕京は、秋こそあれ、殆ど春なき都城なり。

而して、その春夏の際に、五風十雨の節を數ふるが如くに至るなり。風温かにしては沙塵を捲き、雨寒くしては溝水の満

甦る

蔽、掩

つる幾次。昨日まで灰色に黯く褐色に褪めし天地の、宛ら一夜裏に抹刷せられしやうなる新緑の色に甦り、滿城の春光忽地に生ず。その轉變の激甚なる、洵に駭心の趣ありて、轉た痛快に勝へず。蓋し、城中樹木多からざるも、あれば則ち槩ね巨幹老梢、蟠龍の如く翠蓋に似、槐や榆や棗や、多くは數圍の大木あるも、就中雄を稱するは楊柳なり。

楊枝の高きは層樓を抽きて、その梢直ちに蒼空を摩し、柳條の長きもの地を拂うて、その蔭、能く一隊の人馬を蔽ふに足る。若し、夫れ、我が東京の名だたる老樹の如きは、陌頭街上、到る處に逢著すべし。

予が寓は、河を隔てて、城壁の高さ二三丈なるに對す。河水殆

ど死して蓬篚滿ち、石累々たる十餘町に亙り、二圍三圍の老楊古柳相望むもの無慮數十株、春夏の際、條伸び葉繁りては、丹壁掩ひ盡されて、また影を留めず。瀟洒たる島帝國の景に、周匝數圍の楊柳はものものしきに過ぎんも、彼の雄大なる山水樓閣は、竟に、わがよわくしき細柳の配置を許さず。況や、赭山褐水の單調を破り、花なき廣野の春を春として、滿目の生氣を發揮せんには、楊柳もまた偉大ならざるを得ず。一圍あれど柳は柳かなの句は、また、一圍ありて柳は柳かなと爲して、始めて、燕客の感に切なるを覺ゆるなり。

二一 萬里長城

土井 晚翠

征驂

生ける歴史か、積り來し齡は高し、二千年。
影は、萬里の空に入る、名も、長城の壁の上、
落日低く、雲淡く、關山、みすく、暮れんとす、
征驂悵み留りて、遊子俯仰の影一つ。

絶域、花は稀ながら、平蕪の綠、今、深し。
春、乾坤に回りては、空、ことごとく霞みゆく。
天地の色は老いずして、人間の世は移らふを、
歌ふか、高く、大空に、姿は見えぬ夕雲雀。

嗚呼、跡ふりぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の

昔に返り、何の地か、今、秦皇の霸圖を見ん。
殘壘破壁聲もなし、恨も暗し夕まぐれ、
春朦朧のたゞ中に、俯仰遊子の影一つ。

二二二 おどろのした

法皇―
後白河法皇
みかど―
後鳥羽天皇
あまねき御
うつくしみの浪、やしまの外まで
流れ、廣き御惠の陰、
筑波山の麓
よりもしげ

建久三年三月十三日、法皇、かくれさせ給ひにし後は、みかど、ひとへに、世をしろしめして、四方の海、波靜かに、吹く風も枝を鳴さず、世治り民やすくして、あまねき御うつくしみの浪、秋津洲の外までながれ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し。よろづの道々にあきらけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも、敷島の道なんす

ぐれさせたまひける。御歌、かすしらず、人の口にある中にも、

・ 奥山のおどろの下もふみわけて

道ある世ぞと人にしらせむ

と侍るこそ、まつりごと大事とおぼされけるほど、しるく聞えて、いと、いみじく、やんごとなくは侍れ。

建久九年正月、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひておりる給ふ。位におはしますこと十五年なりき。今日明日、はたちばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有様よりは、なかなかやすらかに、御幸など、御心のまゝならんとにや。世をしろしめすことは、今もかはらねば、いとめでたし。鳥羽殿、白河殿なども修理せ

白河殿―山
城國愛宕郡

くおはしま
して、(古今
集序)
つくばねの
このもかの
もに陰はあ
れど、君が
御かげにま
すかげはな
し。(古今集)

二二二 おどろのした

水無瀬一攝
津國三島
郡

元久一
土御門天皇
の御代の年
號。

させ給ひて、常に渡りすませ給へど、尙、又、水無瀬といふ處に、
えもいはずおもしろき院づくりして、しばく通ひおはし
ましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆく限り、世をひッ
かして、あそびをのみぞしたまふ。所がらも、はるばると、川に
臨める眺望、いとおもしろくなん。元久の頃、詩に歌を合せら
れしにも、とりわきてこそは、

見わたせば山もとかすむ水無瀬川

ゆふべは秋となにおもひけむ

かやぶきの廊渡殿などはるばると、艶にをかしうせさせ給
へり。御まへの山より瀧落されたる石のたゞずまひ、苔深き
み山木に枝さしかはしたる庭の小松も、實に、實に、千世をこ

めたる霞の洞なり。(増鏡)

三三 憲法ノ上諭

明治二十二
年二月十一
日宣布

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル
所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民
ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿德良能ヲ發達セシメ
ムコトヲ願ヒ又其ノ翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶
持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履
踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及
臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラ
シム

國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フ
ル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ
行フコトヲ愆ラサルヘシ

朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ
此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシム
ヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時
ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有效ナラシムルノ期トスヘシ
將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ク
見ルニ至ラハ朕及朕カ繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ
議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議

決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコト
ヲ得サルヘシ

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任
スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從
順ノ義務ヲ負フヘシ

二四 憲法發布式祝辭 三條 實美

臣等鸞駕ノ臨御ヲ辱ウシ龍顏ニ咫尺シ謹ミテ感激ノ意ヲ
陳ベ併セテ臣等ガ皇猷ヲ服膺シ聖謨ニ對揚スルノ微衷ヲ
表スルノ光榮ヲ得タリ。

恭シク惟ミルニ昨日大命ヲ發セラレ帝國ノ憲法ヲ公布シ、

*明治二十二年二月十二日、上野に臨幸せさせらる。

明カニ條章ヲ定メテ、臣民ノ權利ヲ保護セラル。聖意謙讓、率先
 先、遵由ノ旨ヲ奉シ、天恩優渥、公議翼贊ノ道ヲ廣ム。臣等、躬、優
 爵ヲ賜ハリ、家、華紳ニ列ス。素ヨリ、私ヲ棄テテ公ニ殉ヒ、國家
 ニ藩屏タルノ分義ヲ有ス。況ヤ、貴族院ヲ設ケテ、待ツニ立憲
 ノ要素ヲ以テシ、委ヌルニ、協贊ノ重任ヲ以テセラル。獨リ、臣
 等、微躬、深ク聖恩ニ浴スルノミナラズ、臣等ガ祖先、亦與リテ
 皇澤ヲ被ルコトヲ得。自今、臣等、奮ヒテ、駑鈍ニ鞭チ、心ヲ竭シ
 慮ヲ致シ、公道ヲ保持シ、偏倚ヲ掌柱シ、國家ノ隆運ヲ扶翼シ、
 臣民ノ幸福ヲ助贊スルコトヲ冀望シ、自ラ良心ニ誓ヒ、肝膽
 ナ陳瀝シ、陛下ノ垂聽ヲ祈リ、併セテ、謹ミテ、皇祚ノ萬歲ヲ祝
 シ奉ル。

駑鈍ニ鞭ツ
 偏倚ヲ掌柱
 ス

二五 國 法

穂 積 八 束

國法は、其の實質よりいへば、國家的生存の要件たり。其の形
 式よりいへば、國家の意志の發表たり。國家は、其の永久にし
 て圓滿なる存在を欲す。其の意志の發表せられたるもの、即
 ち法たり。國家の意志は、主權に由りて表示せらる。國法は、國
 家主權の命令たる所以なり。法に遵由するは、其の實質より
 いへば、公同生存の要件に適合するなり。其の形式よりいへ
 ば、國家主權の命令に服従するなり。國の分子は、國の主權に
 全然服従するが故に、主權の命令たる國法に遵由するなり。
 法は王言なり。皇位を以て主權とする我が國體に於て、法は

主權

諮詢

神集ひに集
ふ
神謀りに謀
る

主權の命令なりといふときは、法は天皇の詔敕たること、辯明を要せず。法を「のり」と訓ず、蓋し、王者の宣言の意義なり。法を宣言するの形式は、時世によりて同じからず。憲法、法律、命令、詔敕といふの類、固より、宣言の形式を分つに過ぎず。君主の命令たるに於て同じ。君主は、法令の案を國の統治の機關に諮詢し、其の協贊補弼に依るは、固より、法令の君命たるを妨げざるなり。國政を國民に諮るは、近世憲政の美果たるのみならず、太古既に、其の範を遺す。八百萬の神々を、安の河原に神集ひに集はしめ、神謀りに謀り給ひしは、國事を衆庶と共に謀るの大義なり。天孫の降臨、神武の東征、皆衆と共に、之を謀る。天子は、天祖の位を受け、天祖の國を統治す、其の國の

大政を經理するは、天祖に奉事する所以なり。故に、祭政岐せず、國事は神事なり。天子は、其の國を私せず、天祖の子孫たる衆庶と共に、之を經營す。君民共に、其の同祖に奉事し、其餘惠に酬いんと欲するなり。國政は、天祖の公事たり、君主の私事に非ず。國法は、天祖の命令たり、君主の私言に非ず。國憲に遵由し、國法に適從するは、臣民の君主に對する奉公の責務たると共に、天皇の天祖に對するの責務たり。國法に遵由するは、國民共に、其の天祖に對する奉公の責務たるは、我が固有の國教に源由する國體の美風なり。國法は神聖なり。我が神聖なる皇位の命令たるが故なり。法律を以て民衆共相の約束と爲す外國の政體に於ても、なほ、

法は神聖にして犯すべからずと爲す。蓋し、之を尊重し畏敬せしむるは、社會の必要に出でたるなり。況や、我が特殊の國體に於てをや。祖先教を基礎として構成せられたる國家に於ては、主權は、天祖の威力なり、國法は天祖の命令なり。天祖が其の慈愛する子孫の永久圓滿の存在を保護するの命令に背反するは、現在の社會の秩序を紊亂するのみならず、既往將來の國家の任務を蔑視し、天祖の威靈に背反する者たり。神聖なる國法に背反するは、現世の社會に對する罪惡たるのみならず、天祖に對し子孫に對するの罪惡にして、神人共に赦さざる所たり。我が祖先教に源由する國體に於ては、社會の崇拜する主力と其の服従する主力と合一し、國教の

淵源と國法の源由とが歸一するが故に、國法の神聖にして侵すべからざる所以明かなり。

啓發

人をして社會の法則に遵由せしむるは、人生の大道たり。唯之に遵由せしむるの誘因は、人の智識・信仰・若くは外部の威力なり。人が、社會的啓發の理法を完全に自覺し、法に依遵するは、人生完成の途たることを確認するの智識を具備する時は、法は、制裁を待たずして自ら行はれん。然れども、これ、現世凡愚に望むべからざる所たり。故に、古より之を神力の信仰及び國家の威力に訴へて、その遵由を全うせんと欲するなり。宗教と政府との社會的任務はこゝに存す。されど、その宗教の源由とその主權の源由とを異にする國家社會に於

觀念

ては、宗旨の教義と國家の命令と、その歸一を保つことを得ざるが故に、人心は、信仰と服従との間に迷ひ、國法を神聖なりと爲すの觀念なし。社會進化の理法を自覺する智能なく、又、法を神聖なりと爲す信仰なき國民に對しては、主權の力を以て之を強制するの外なし。是に於て、法を維持するが爲に、更に助法を要し、その力を維持するが爲に、更に他の力を要す。立法煩雜にして、權力苛酷ならざるを得ず。國民は、その法制の煩と負擔の重とに堪へざらんとす。これ、國教を放棄し信仰を蔑視したる現世の諸國の状態たり。今、我が國は、幸にして、政教一致の千古の國粹を保守し得たるは、社會進化の最惠の要件を保守し得たる者と謂ふべし。彼の歐洲の近

最惠の要件

世の史跡を観るに、道理によりて國を治めんことを欲し、宗教を蔑視し信仰を放棄し、社會の大改造を試みたりし以來、百年の久しきを経たり。而して、その現状は、放棄したる信仰は、再び回收すべからず、豫期したる道理の主宰は、遠き未來に望むべく、現世に實行するを得ず。已むを得ず、更に、國民の負擔を増重し、兵力と財力とを大いにし、威力を以て、纔かに、國法を強行するの制裁力と爲すに過ぎず。純白なる道理の世は、猶遠き未來に屬す。現世は、猶個人も社會も、信仰の力にて動く時代なり。故に、社會啓發の要件に適合する我が千古固有の國民的信仰を保持するは、人生進化の天與の武器を愛惜する所以たる者なり。(國民教育愛國心)

白露も時雨もいたくもる山は、下葉残らず色づきにけり(古今集、紀貫之)
 柏原—近江國坂田郡。不破關址—美濃國不破郡關原村にあり。
(四) さよ千鳥、聲こそ近く鳴海潟。傾く月にしほやみつらん。
(新古今集、藤原季能)
 鳴海—尾張國愛知郡。

なり。時雨もいたくもる山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば、夜の間に、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。番馬醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる熱田の八劍伏し拜み、潮干(四)に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいつくと遠江、濱名の橋の夕沙に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、たれかあはれと夕暮の、いりあひなれば、今はとて、池田の宿につきたまふ。
 旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天

西行法師—(二七六—二八五)
 年たけてまたこゆべしとおもひさや、命なりけり、小夜の中山。
(新古今集)
 菊川—遠江國榛原郡。光親—藤原光親、承久に院宣書きたる人。但し、菊川にて四句を書きしは、中納言藤原宗行なり。
 南陽縣—南

龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そのことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔、西行法師が、命なりけり。」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足はやみ、日、己に、亭午に上れば、餉進らする程とて、輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、
 昔南陽縣菊水、 汲下流而延齡。
 今東海道菊河、 宿西岸而終命。
 と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は、わが身の上になり、あは

陽郵縣有甘谷、谷中水甘美、上

有大菊、落水從山流下。谷中人

家飲此水。上壽百二十三

十、其中百餘歲、七八

十者則爲天。風俗通

大井川、駿河と遠江との界。

龜山殿、山城國葛野郡嵯峨にあり

離宮。

駿河なるうつの山邊の

れやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭、鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は、二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いとしげりて道もなし。昔業平の中將の住所をもとむとて、東の方に下りしに、夢にも

うつゝにも
（伊勢物語）

富士の嶺の煙はなほも立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。
（新古今集、藤原家隆）

七月廿六日
元弘元年
（一九一）

人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や浅き舟浮けて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ足柄山の巔より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそつきたまひけれ。
（太平記）

二七 雨 後

藤井高尚

春雨の夜のしづかなるにつくづくと花のことおもひつゝ
 櫻は咲きぬらん谷もつぼみやあかうなりぬらんはれなば
 行きて見ばやとおもひつゝまどろみたるに目さめてきけ
 ば雫の音もせずひましらみたりおき出でて近きわたりな
 ればまづ籠に至りて見るにおもひしにたがはず名残の露
 しげきに花も争ひてかず咲き出でたるぬれ色うつく
 しうをかしげに雨は花のかぞいろはなりかし（松舎文集）

ねがふらせり春の
 たつと
 とのりあ

二八 百 蟲 譜

横井也 有

莊周が夢一昔者莊周夢
 爲三胡蝶、羽
 翩然胡蝶也、俄然覺、
 則遽遽然周也。（莊子）

古今の序一
 花になく
 鶯、水にす
 む蛙の聲を



蛙のこゝろを
 やまへて
 むすむる

横井也 有 像 及 筆 蹟

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも、
 啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでた
 けれ。さてこそ、莊周が夢も、
 この物には託しけめ。唯、蜻
 蛉のみこそ彼には稍、竝ぶ
 らめど、絲に繋がれ、繭にさ
 されて、童の翫物となるも
 苦し。
 蛙は、古今の序に書かれて
 より、歌よみの部に思はれ

きけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

たるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に跳んで、翁の目覺したれば、このものこと、更にも謗り難し。蟬は、たゞ、五月晴に聞きそめたる程がよきなり。や、日ざかりに鳴きしきる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり、初蟬といはるるこそ大いなる手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。螢は、たぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、唯、このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに、貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。

蜘蛛は、巧みに網を結んで、潜まつて物を害せんとす。ひとへに、奸賊の心ありて、いとにくし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらんか。

蟻は、明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか、槐安の都を遁れて、その身の安き事を得ん。さるも、たよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は、長嘯子に憐まる。狗の齒に噛まる、蚤は、たまたまにして、猿の手にさぐらる、虱は、逃る、こと難かるべし。蚰蜒は、梶原といへり。さるは、梶原が異名なりや、げぢげぢが異名なりや、先後、

淳于棼が、夢に大槐安國に入り、王に見えて南柯郡の守となり、二十年を経て送り出さると見て夢寤め、古槐下を尋ねしに蟻穴ありきといふ故事によれるなり。
歐陽修、字は永叔、宋の人。その作に憎む若蠅賦あり。
木下勝俊。その作に憐紙魚詞あり。

今は知り難し。

蝸牛の家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きには如かず。蛇・蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは、不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたるほこりより、その心、いかつなり。人の上にも、この類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。唯、原吉原を駕籠にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・響蟲は、その音の似たるを以て名に呼べり。松蟲のその木にもよらぬに、いかで、かく名をつけたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも、同じ名ありて、松を枯し人にうとまる。

原・吉原
原は駿河國
駿東郡、吉
原は同富士
郡にあり。

藻にすむ蟲
海士のか
る藻にすむ
蟲のわれか
らと、音を
こそなしか
め、世をば
恨みじ。(古
今集、藤原直
子)

竹林の七賢
嵇・康・阮
籍・山濤・向
秀・劉伶・阮
咸・王戎の
七人。いづ
れも、晋の
代の人なり。

蟋蟀は、つゞれさせと鳴きて、人のために夜寒を教へ、藻にすむ蟲は、われからと、唯、身の上を嘆くらんを、蓑蟲の父よと呼ぶはあはれ深し。されど、父のみこひて、などは、母を慕はざるらん。

蚊は、憎むべき限りながら、さすが、卯月の頃、端居めづらしき夕、始めて仄かに聞きたらん、又は、長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。藪蚊は、殊にはげしきを、彼の七賢の夜話には、いかに團扇の隙なかりけん。(鶉衣)

二九 四季

卜部 兼好

をりふしのうつりかはるこそ物毎にあはれなれ。ものあ

あめれ

けしきだつ

四月八日に行
はる。
賀茂の祭。四月
の中の酉の日
に行はる。

はれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今ひとときは心もうき立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつ、ほどこそあれ、をりしも雨風うちつづきて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに、唯、心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ、なほ梅の匂にぞ、いにしへのこともたちかへり、こひしうおもひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、おもひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに、茂りゆくほどこそ、世

水鶏

夕顔

六月祓

わさ田

おぼしきこと
いはぬは、げに
ぞ腹ふくるい
こいしける。
かればこそ、
昔の人は、物い
はまほしくな
れば、あなをほ
りてはいひい
れ侍りけめ。
(大鏡)

のあはれも人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏のたぐなど、こゝろぼそからぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顔のしろく見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

たなばたまつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈りほすなど、とりあつめたることは秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、皆、源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、おなじこと、また、今更にいはいはじともあらず。おぼしきこといはぬは腹ふくるゝわさなれば、筆にまか

わぢきなし
かいやる

せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使だつなどぞ、あはれにやんことなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたうくらきに、松どもともして、

御佛名
荷前の使

追儼
四方拜

夜半すぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらんことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりもこゝろぼそけれ。なき人の來る夜とて、魂まつるわざは、この頃、都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて、あけゆく空の景色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。(徒然草)

三〇 年ふる鯉

松平定信

ものす

年ふる鯉のありけり。いかにして、様々のことにもかゝり給はで、かくましく、給ふか。と問へば、さらば、かたりものせん。かくはしき餌のあれば、もとめゆきても、くはまほしきことながら、これぞ大事のことと、心にしめて見れば、怪しきことあるものなり。さおもひつければ、鱮ふりて遠く免れて、いささかも顧みず。よそのいをも、あやしき事よとは思へど、遠く去ることをせず。わらはべなどは、かの釣針てふものにかかりて、いかほどもとらるゝを見ながらも、とにかく、そのかくはしきに心つながれて、あたりはなれずありきて、心の中には、愚なるいをもは、皆、彼の餌にとらるれど、いかで、われは、かれにもものせられんとおもへど、ひねもす、このあたりに

いを

ただよふ

ただよひぬれば、かの怪しき外に、餌のなきにせんかたなく、立ちよりて、少しくひてんなどとする中に、つひには、かゝるもあるぞかし。又、網といふものあり。さと音しぬれば、四方皆網の目なり。こは如何にせんと思ふに、あるは、あわてさわぐもあり、又は、何ばかりの事かあらんなど、賢き人をも侮りて、をどりあがりてこえんとし、または破らんとするを、人はもとより人なれば、様々にあつかひて、つひにとるぞかし。われは、かのさと音するをきけば、心しづめて、水底につきてはなれず。あびきは、上の方をゆきぬ。ゆるに、とらるゝことなし。かはうそ。あじかなんといふものもあれど、深くひそまり隠るれば、そのうれひもまぬがれぬ。又、俄かに、雨降り出でて、おも

あびき

龍門

たどる

ひもよらぬあたり、又は、つねいさゝか水の落つる岩がねな
 どより、瀧の白絲くりためて、落ちそふ勢のはげしさに、心も
 浮き立ちて、彼の龍門の瀧ならぬことは知りながらも、あま
 りに心地のよさにほだされて、その瀧をのぼるにぞ、あるは、
 岩角にあたりて傷つくもあり。からうじてのぼりぬるも、雨
 やみぬれば、いと淺き瀨なり。かへらん道もしらねば、ふかき
 ところどころたどりゆくを、ゆく人などのみつけてとるぞ
 かし。かうやうのにはかなる勢にものらずして、かく、百とせ
 をもいくたびか經にけん」と語りき。(花月草紙)

三一 述 懷

佐久間象山

そらみつ

高知らす

しく

むけ平ぐ

向伏す

たらはす

禍津日

*我心匪石、
 不可轉也、
 我心匪席、
 不可卷也
 (詩經)
 たまきはる

そらみつやまとの國は、かけまくもあやにかしこき、神魯伎
 の神の御代より、高知らす天つ日嗣を、天地と月日とともに、
 遠長く萬千秋に、すめろぎのしきます國と、立ちむかふあた
 の軍を、うち拂ひむけ平げて、青雲のたなびく極み、白雲の向
 伏す限り、國原に馬立て竝べ、海原は大船つらね、天の下に國
 の稜威を、望月のたらはしてむと、吾はしも身をも思はず、月
 に日に心盡すを、禍津日の神の爲業か、行く道のいくらもあ
 らで、みちまけに躓きしつゝ、罪をさへ負ひてしあれど、石こ
 そは轉びもすめれ、草こそは靡きもすめれ、すめろぎのみこ
 との爲と、みかと思ふますらをわれは、たまきはる命のかぎ
 り、石のごとえやは轉ばむ、草のごとえやは靡かむ。天地の大

時ゆじく
天ゆ翔る

御神たち、信濃の大國靈、時じくに天つ御空ゆ、天翔り見そなはしてよ、吾が眞心を。

すめろぎのみかどかしこみ國のため

思ふ心は神ぞ知るらむ

三三三 日本國民の覺悟

我に二千五百年の古き歴史あり、我に特絶の文化あり、我に人種的無限の膨脹力あり、我に世界に優秀なる武力あり、我の地理的位置や甚だ良好なり。恰も、これ、天の我が國に命じ、國民をして、偉大なる確信を抱懷せしめ、偉大なる膨脹をなさしめんとするものに似たり。古語に云ふ、天*與取*らざれば

天*與弗取、

反受三其咎一
(史記)

反つてその咎を受くと、我が國、今や、實に、その境遇に在り、察せざるべからず。

英國の佛國に對抗して、海外に廣大なる領土を獲得せる時機に當りてや、英國の人口は、遽然として、從來の三分の一を増加し、而して、此等増殖せる人民は、加奈太に出で、印度に渡り、濠洲に航し、今日の大英帝國の基礎はこゝに成り、一千七百年の末、佛に大革命起り、新興の氣運佛國の全般に溢るゝや、佛國の人口は、當時歐洲各國の上位に居り、大ナポレオンは、この新興の國民を率ゐて全歐を席卷し、有史以來、空前の大功業を建てたり。近く獨逸にビスマルク出で、その大策に基きて、新に獨逸帝國の建設成るや、當初に於ては、佛國と人

ナポレオン
第一世—(西
曆一七九—一八
二—)
ビスマルク
—(西曆一八
五—一八九六)

口略、同數なりしもの、俄然として増殖し來り、四十年にして、殆ど佛に二倍する大國民となれり。凡そ、國家の興るや、人口の顯著なる増殖、これに伴ふを例とするが如し。今、飜つて、之を我が民族に檢するに、明治初年、人口三千五百萬なりしもの、四十年にして、六千萬人となり、向後五十年にして、日本民族は將に一億に達せんとす。我が民族のこの顯著なる増加は、これ、自然が我が民族を導きて、一大發展をなさしむる所以なりと確信し得べく、我等は、この氣運に乗じて、西に南に東に、益、膨脹せざるべからざるなり。我等の膨脹は、自然の導く所なるを深く確信するを要す。

古、羅馬の興れる、その地中海邊の位置や、交通便宜にして、外

ハンニバル
（西曆紀
元前二四七
八三）

敵侵し難く、洵に好箇の地勢に在りき。當時、カルタゴ富めりと雖も、地、阿弗利加の一端に僻在して、歐洲に霸を稱するに適せず、ハンニバルの勇を以てするも、交通不便にして、遂に羅馬を亡すに至らず、却つて、羅馬の爲に併合せらるゝに至りたり。又、古、英國の海外に廣大なる領土を獲得し、而して、佛の爲に亡されざりしは、實に、其の地理上の位置宜しきを得たるに由る。露國の歐亞に膨脹せる、土耳其の亞細亞、阿弗利加、並びに、歐羅巴に跨りて大國を爲せる、皆、その地理上の關係絶好なりしこと、その主なる原因たり。我が日本は如何。四面環らすに海を以てし、外敵容易に侵入し難く、而して、外に對しては、交通自在にして、極めて、海外發展に便なり。正に、こ

れ、天與の好位置に居るものにして、この位置に居りて、若し
發展せずんば、これ、無氣力の民族なり。その未來を有する能
はざる民族なり。

古、佛國の全歐洲に膨脹せるや、佛國の光榮の爲に、餘りに武
力に依り、自然の要求以上に、他列國を壓迫せり。故に、大那翁
の大を以てするも、終に、ウエリントン並びにブリュッヘル
の爲に、ワータルローに大敗し、その偉業、一朝にして消滅せ
り。古、土耳其の三大陸に跨りて興れる、唯、單に兵士を得、資金
を徴するのみを以て目的とし、又、何等自然の要求に應ずる
所あらざりしなり。是を以て、土耳其の勢力は、漸次に滅殺せ
られ、今日の境遇を見るに至れり。力は力によりて破られ、策

ウエリント
ン
（西曆一七九
一八五三）
ブリュッヘ
ル
（西曆一七二
一八七九）

は策を以て伐たる、これ人事の常數なり。然れども、自然の要
求による膨脹に至りては、何者も之を阻止する能はざるな
り。我が民族にして、無限に増殖する人口を率ゐ、我が仁愛の
精神並びに我が物質的文明を以て、我が民族當然の使命を
遂ぐる大理想を提げて起たんか、何れの民族も、之を阻止す
る能はざるは、論を俟たざるなり。

列強にして、各國民的自信を有し、その大確信に基づきて相
競争し、かくして、歐洲の文化てふもの生じ來るとせば、我も、
亦この大確信を抱持し、列強と競争して後れざらんことを
期せざるべからず。輕躁浮薄なる歐化は自滅にして、大國民
の確信に基づく大活動は、我が民族を生かし、我が民族を發

達せしむる所以なり。若し、夫れ、國民的自覺の意義を誤解し、徒らに自負尊大に流れ、或は、侵略的脅威的なるが如きは、固より我が民族の取らざる所なり。要は、恰も、大人にして益、恭謙なるが如く、内、深く自國の文化を尊重し、之をして益、進化發達せしむべき大理想を包藏し、外、愈、禮節を重んじ法規を尊び、益、他國民と親和し、博愛の精神を發揮し、愈、科學を攻究應用し、智、德、勇を備ふる優雅堅實なる文化の國民たらんことを希ふにあり。確信や、決して排他を意味するに非ざるなり。この確信を抱持して、外國文明の研究、始めて、眞にその效用を見るべく、學問の發達、更に新面目を呈すべく、國富も増殖すべく、國民の品位も向上すべく、所謂東西兩洋の文化は、

我が民族によりて渾然として融合せられ、我が民族の光榮は、永遠に輝くに至るべきなり。(歐米我觀に據る)

改訂中等國文讀本卷八終

大正八年一月卅一日
教育部
國語教科書
檢定

大正四年十一月三日發行
大正五年一月二十日訂正再版發行
大正七年十一月三日訂正三版發行
大正八年一月十五日訂正四版印刷
大正八年一月十五日訂正四版發行



著者

藤井乙男

印刷者兼

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
金港堂書籍株式會社

代表者

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
原亮一郎

發行所

東京市日本橋區本町三丁目
電話本局一六一七番三〇二番

金港堂書籍株式會社
(振替貯金口座東京八八一五番)

改訂中等國文讀本全十冊

定價	卷一、二各金參拾四錢 自三至十各金參拾錢
大正八年臨時定價	卷一、二各金四拾八錢 自三至十各金四拾貳錢

廣

廣島縣安藝



廣島縣安藝郡堀江村

廣島市外温島村上矢田谷

矢田芳一

一

温島村

矢田芳一

矢田
温島村
上矢田
谷
矢田
芳一

